第６回銀華文学賞佳作

君は終幕を前にして佇むか

土田ひろし

「おぉ、冷える。風邪を引きそうだ」

と、幸平はジャンパーの襟をかき立てながら身を震わせたが、すぐに「ふ、ふ、ふ」と笑った。この場に及んでも、我が身をいたわる自分がおかしかったのだ。

もうすぐ、予定の瞬間がやってこようとしているのに、やはり心の底には未練がこびりついているのだろうか。ひとつ北側の岬に立つホテルの灯りが、苦笑いを浮かべた幸平の顔をうっすらと映し出している。

目の前にある柵の向こうには黒々とした海が横たわるが、それは、足元から這い上がってくるかすかな波の音でしか確認できない。

「それにしてもこんな物を作りやがって」

小さく舌打ちをした幸平は、透明な板で作られたフェンスをこぶしで叩いた。その上部は、先を鋭くとがらせた鉄製の棒が格子状に組み合わせられ、檻のようになっている。そこには、何が何でもここを乗り越えさせまいとする強い意思が込められているようだ。

最初は、ほかの場所も考えにあった。もうひとつ南側の岬もよさそうに見え、一週間ほど前に下見をしてみたのだが、先端にまでたどりつけなかった。

身の丈以上もある大岩が行く手を阻んだのだ。ロープを灌木にでもくくりつけて降りれば不可能ではなさそうだが、そこまでする気力が湧かない。それに、行きついた先が目的にかなった条件にあるのかも確かではない。

やはりこの場所がよい。ここは古来より選り抜かれた場所なのだ。何と言っても確実性がある。百パーセント保証と言えるのではないか。この行為に失敗は許されない。完璧を期さなければならないのだ。幸平はフェンスの上に並んで立つ棒の一本を握りしめた。

海から吹き上がる風が髪を大きく揺らすが、気持が昂ぶってきたせいなのだろう、いまは寒さを感じない。いよいよ自分の意思で、おのれの生き方を決める時がきたのだ。誰に

も惑わされないで。
とは言っても、未練はないかと自分に問いただしてみたら、一割くらいはあるよという返事が返ってくるような気がする。いや、三割を超えるかもしれない。
何と言ってもいまのところ体調はよいし、気分も悪くない。あっちの方も元気で、七十歳を過ぎても男子の権威は保っている。いまからでも、もうひと花咲かせてみせるぜ、と広言する気概だってあるからだ。
しかしそうなると、再び周囲に惑わされ、病気と取っ組み合いながら、うろうろと生きる羽目になってしまう。
がんの宣告はショックだった。まだ初期の段階だから治る可能性は大きいと医者は言ったが、自分で調べてみたら、初期であっても七十％ぐらいの生存率だということがわかった。しかもこの数値は五年生存率とのこと。つまり、うまくいっても五年後に生きている保証はないのだ。その上、手術と放射線治療をしての数値だ。
話に聞くと、肺がんの手術はとてつもなく苦しいらしい。この歳になって、そんなつらい思いをするのはたくさんだ。それに、たとえうまくいっても、その先、病気に気兼ねし、ご機嫌をとって命を永らえることになる。
つまり、命が人質になって、ＱＯＬなんてどっかに吹っ飛んでしまうのじゃないか。それに、いつボケが始まるかもしれない。いや、最近の物忘れのひどさを考えると、もう始まっている可能性だってある。
二年前に女房が逝っちまってからは、話す相手も少なくなってしまったんで、脳への刺激も減って、密かに退化が進んでいるような気がする。
この先、ボケが本格化したら自分はどうなるのだろう。おしめを着けさせられ、ゆるみきった顔によだれを垂らした姿が目に浮かぶ。その上、病気との格闘だ。だらしのない顔が苦痛にゆがむから、そこには、なおさら知性のかけらもない表情が、遠慮のないわめき声とともに病室の空気をかき乱すに違いない。押さえつけられ、あげくの果てにはベッドにくくりつけられた姿。
「おぉ、いやだ」
ぶるっと身を震わせた幸平は、思わず両手で顔を覆った。
妻は二年前にこの世を去った。まったく突然に。万物の霊長たる人間が、こんなに簡単に死んでしまうものかと思わせるほど、冬の朝のでき事は唐突であった。
いつものように遅い朝食の準備をしていた妻が、流し台の前で崩れ落ちる光景は、幸平

の目にまるでテレビの一画面のように映った。
そこで何が起こったか理解できぬまま抱き起こす腕に、妻の身体は頼りのない重さを預けて動かない。その感覚が事の重大さを脳に伝え終わると、幸平の身体は激しく反応した。
死亡は救急車の中で確認された。病名は胸部の大動脈破裂。ひとたまりもなかった。幸平には妻が哀れに思えてならなかった。六十八年にわたる人生で味わった労苦の代償をこれから得ようというときに、こんな無慈悲な仕打ちを受けなければならないとは。
通夜や葬儀の席で
「でも、あまり苦しむこともなく、人生を終えられたことがせめてもの慰めになりますね」と親しい人に言われたが、これは、人間誰しもあっさり死にたいと願っているからなのだろう。病気や事故で長い間苦しみながら、息を引き取っていく残酷さから逃れたいからなのだ。
確かに、その点では少しばかり納得できるような気もするが、問題は自分の意思に反して死が押しつけられることにある。生きることもままならぬものだが、ほとんどの死は、本人の意思がどうであろうと、神かあるいは自然の摂理かは知らないが、一方的に与えられるものなのだ。
生きる権利は声だかに叫ばれ広く認知されるが、死ぬ権利はそれを言葉に出すだけで、罪深きものとして非難される。不治の病ととことん闘ったうえ、意思に反して死を与えられた人は賞賛されるのに、負けるに決まっている闘いを避けようとして、みずから死を選んだ人は、反道徳的、反宗教的だとして非難される。
生きる権利があれば死ぬ権利だってあって当然なのに、それが認められない。人生は誰の物でもなく、その人の所有物であり、その人の支配下にあるという考えはなぜ間違いなのだろうか。
妻の死はそんな疑問を幸平に残した。死ぬということは、生きると同じ重みを持っているはずだ。つまり、いかに死ぬかは、いかに生きるかと同じくらいの意味があるということだ。だから、それを体力も気力もあるうちに実行しなければならない。
「さて、そろそろ始めるか」
ぽつりと言うと、幸平はポケットから小さな懐中電灯を取り出し、かたわらのザックの中を照らした。
「これだ。こいつの真ん中をてっぺんに引っかければ、向こう側まで降りられる。あとは一、二の三だ」

取り出された物は、ロープとアルミのパイプで作られた縄ばしご。パイプを握った手の平に冷たさが衝撃となって伝わる。

「次はあれだ」

縄ばしごを膝に抱えながら、幸平はザックの底をまさぐった。

「しかし、結構な量だよなぁ、これは。よくも集めたもんだ」

大きくふくらんだ布の袋を引き出しながら、幸平は口元をゆるめた。

「小判や金貨もお供してくれるということだ。いや、お供と言うよりは証人と言ったほうがよいかもな」

袋の感触を確かめながら幸平は「は、は、は」と小さく笑った。

一段と強さを増した海風がジャンパーの襟を揺らし、網代あたりの灯が、揺らめきながら黒い海の上に点々と広がる。

子供の頃に始めたコインの収集は、大学入試の慌ただしさにまぎれて中断したが、就職後しばらくして再開、現在まで続いている。ほかにこれはと言った趣味を持たない幸平にとって、コインの収集は大きな生き甲斐であった。

これまでの六十年間、正確に言えば、中断期間を除いた五十三年間に集めた数は膨大で、その中には、一枚五十万円もする明治時代初期の金貨や江戸時代の小判が何枚かあり、総額は優に五百万円を超えた。袋には、そのうちでも価値の高い物が詰め込まれている。

いまは、それらが最後の出番を待っている。幸平は袋の中に手を差し入れた。指先から伝わってくる重厚な感触が、これからの行動を鼓舞しているようだ。

風がザックの開口部をパタパタと揺する。幸平は、「さぁ、行こう」と力強く言うと、鷲づかみにしたコインをジャンパーやズボンのポケットにねじ込んだ。

「これでよし」

コインは重しとなって、わが身体を海底に留め、俺の行為を最後まで見届けてくれることになる。

「そう、次はこいつだ」

まるで、普段やり慣れている仕事を淡々とこなすようだ。幸平は、柵の上の鉄棒に縄ばしごの中央あたりを差し込むと、懐中電灯で向こう側を照らした。

「大丈夫だ。下まで届いている」

北側の岬からかすかに射し込むホテルの灯りを受けた顔に緊張が走る。

「さぁ」

自分の声に促されるように、幸平は縄ばしごに両手をかけた。風にあおられたパイプがカターンカターンと音を立てる。

「これからいよいよ、主役の登場だ」

両手に力を込め、かすかに漂う明るさを頼りに片足を縄ばしごに乗せる。

目の前の黒々とした風景は、これからおもむく世界を暗示しているみたいだ。死んでしまえば何も残らない。肉体に宿った魂も一緒に滅んでしまい、次の世界で存在を続けるなどあり得ない。

しかし、頭のどこかには不滅の魂を肯定する部分があって、それが死への恐怖を和らげる働きをするようだ。いまの自分もそうかもしれない。いや、きっとそうだ。恐怖ですくみそうになる身体を支えてくれる、その作用に期待しているのだ。

幸平は縄ばしごに乗せた足に力を込め、身体を引き上げようとした。しかし動かない。

ポケットに押し込んだコインが重いからなのか。いや、そうじゃない、足に力が入らないのだ。頭の指示に身体がついてこないのだ。

パイプを握り直し再び足を乗せてみるが、やはり力が入らない。ちょっと休もう。幸平は、少しばかりほっとした自分に嫌悪を感じながら足を降ろした。

決意は薄まってしまったのだろうか。いやいや、そんな薄っぺらなものではなかったはずだ。いましか実行の時はないとあれほど心を固めたのに、このざまは何だ。

死を選んだ人はその場になって、程度の差こそあれためらうという。自分もそんな中にいるのだろうか。ふがいないさに包まれながら幸平は唇を噛んだ。

「よし、もう一度だ」

自らを奮い立たせるように声を強めると、幸平は再び縄ばしごに足をかけようとした。

しかし風にあおられるパイプにうまく乗らない。何度繰り返してもうまくいかない。

膝頭が小刻みに震えている。うまくいかないのは風のせいだけではなかった。依然として、自分の足自体が脳の指令を拒んでいるのだ。

しょせん、死の権利を行使するなんていうのはたわごとであって、自然の理ではない。

それは身勝手な思い込みであり、神をも恐れぬ行為であると身体が判断し、神経の経路を遮断しているのか。

今夜は、何度も決意を確かめた上でここへやってきたのに、このていたらくは何だ。幸平は両手で顔を叩き、自分のだらしなさを嘆いた。

「さぁ、今度こそ。仕切り直しだ」

身体を叱りつけるように両膝を屈伸させ、縄ばしごに手をかける。
その時、風の音に混じり、背後でかすかな物音がした。誰かいる。幸平は身をかがめ暗闇の向こうを窺った。
足音だ。近づいてくる。ホテルからの薄明かりの中、それはすぐに黒いシルエットとなって数メートル先に現れた。懐中電灯らしき光がコンクリートの上を這い回っている。
幸平はとっさに、背後の岩陰に身を寄せた。
人影はフェンスの前までくると固まったように動かない。相変わらず風は強く、大きく揺れる縄ばしごは乾いた音を出し続ける。
何者だろう、こんな夜更けに。もしかしたら警官かもしれない。ここが自殺の名所だから見回っているのだろうか。もしいま見つかったら、すべての計画がご破算になる。
そうなると、懸命に立て直した決心も揺らいでしまうかもしれない。幸平は身を固くし息をのんだ。
やがてその人影は、懐中電灯の光をこちらに向け振った。何かを探しているようだ。縄ばしごの立てる音を気にしているのかもしれない。そうだとすれば、こちらへ近寄ってくるに違いない。
あぁ、そうだ。やっぱりこちらへやってくる。幸平は身を縮め息を殺した。
人影は、縄ばしごの前までくると立ち止まった。懐中電灯の光がフェンスの表を這い回っている。やがて金属音が弱まった。縄ばしごを手にしたようだ。
人影の動きが落ち着かない。きょろきょろとまわりを見回しているように見える。なぜそこに縄ばしごがあるのか、持ち主は誰なのか、それを懸命に考えているのだろう。
そのとき、突然、光が宙を飛んで幸平の足元を襲った。慌てて身体をそらせようとするが、しゃがみ込んだまま固まってしまった姿勢は自由がきかない。崩したバランスを支えきれず、そのままの格好で倒れ込むと、光はこちらに気づかず飛び去った。
再び縄ばしごの音が鳴り出した。懐中電灯の光も見えない。人影はどこかへ行ってしまったのだろうか。
幸平はおそるおそる立ち上がると、闇の向こうをすかし見た。うっすらとしたホテルの灯りを背にうずくまる人影がある。丁度、縄ばしごの下だ。何をしているのだろう。
やがて、ひときわ強い風が吹き抜け、けたたましい金属音が二度三度と鳴り響くと、「よし」という声が風にかすれて聞こえた。
縄ばしごを登り始めた人影が浮かび上がる。

「まずい」
押し殺した声が幸平の喉を突いて出た。このままでは先を越されてしまう。思わず身体が動いた。
「おい、待て、それは俺のだ」
幸平は人影に向かって大声を上げた。
次の瞬間、「わあっ」という叫び声とともにずり落ちる黒い塊。驚愕した様子が闇の中を伝わってくる。
うずくまる人影へ手探りで近づくと「だ、誰だ」と震える声。男だ。懐中電灯を探すが、ない。さっきの場所へ置いてきてしまったようだ。
そのとき、遠くの地面を照らす光の輪が目に入った。男の懐中電灯に違いない。幸平は急いで手を伸ばした。
「お前こそ誰だ」
幸平は上ずった声で訊ねた。光の先に男の顔を捉えようとするがうまくいかない。ますます強くなった風が狂ったように金属音を鳴らし続ける。
幸平は思わず、片方の手をいっぱいに伸ばし縄ばしごを掴もうとした。しかし次の瞬間、足元が何かにすくわれた。虚空を掴んだ手が弧を描き、バランスを失った身体が地面に倒れ込む。
少しばかり頭を打ったのか、意識がはっきりしない。暗い空に突き出たフェンスの先の棒がぼやけて見える。頭の上を鳥が舞っているようだ。見知らぬ世界にひとり残されたような頼りなさが身を包む。自分はなぜ、いまここにいるのか。
頭上を舞う鳥が、地表で舞う落ち葉であることがわかったのは、誰かに肩を揺すられたときだった。光がまぶしい。幸平は思わず片手で顔を覆った。
「大丈夫ですか」
暗闇の中から男の声が聞こえた。後頭部が痛い。もう一方の手で触れてみる。出血はしていないようだが、ふくらみがある。中は大丈夫だろうか。内出血でもしていたらたいへんなことになる。一瞬、頭の中を恐怖が駆け巡った。
しかし、すぐに自分が滑稽に思えた。ついさっきまで、死の権利を実行しようと意気込んでいたのに、いまは命をいたわろうとしている。幸平は思わず、痛みに歪む顔の端をゆるめた。
「しばらく動かないほうがいいですよ」

男は落ち着いた声で言うと、懐中電灯を小脇に抱え、幸平の頭の下に自分のコートを折って差し込んだ。
「お前は誰だ」
「寺尾といいます」
男は静かな口調で答えた。声からすると自分よりは若いようだ。
「あんた、なんでここにいるんだ」
「……」
寺尾は黙ったまま懐中電灯を地面に置いた。光がフェンスの表面に輪となって浮かぶ。縄ばしごは相変わらず金属音を出し続け、背後の木々は激しく揺れ動く。
「寺尾さんだったな、あんたもここで死のうとしたんだろう」
暗闇の中ではわからなかったが、寺尾がうなずいたように見えた。
「俺もここで終わりにしようとしてたんだ。まだまだ体力のあるうちにな」
話し始めると、幸平は急に気持が軽くなったように感じた。寺尾は固まったように動かない。
「あぁ、背中が冷えてきたぜ。氷の上にいるようだ。もういいから、すまないが起こしてくれんか」
頭の痛みは少しやわらいだが、身体を動かすと腰には鈍い痛みが残っている。幸平は寺尾に向かって手を差し出した。
「あなたの名は」
幸平の手をとりながら寺尾が小さな声で訊ねた。しかし、風に吹き流されよく聞き取れない。
「えっ、何だ？」
「あなたの名前です」
今度ははっきりと聞こえた。
「中里だ」
「なぜ、死のうとしているんですか」
寺尾の声が耳元で響いた。
「がんだよ。肺がんだ。それに、ボケも始まったようだし。惨めな死に方をする前に、自分で幕を引きたいと思ってな」
幸平はわざと軽い口調で答えた。

「でも、元気そうな声に聞こえますけど」
「あぁ、いまはな」
「と言うと」
「がんは初期で、医者は治る可能性が大きいって言ってる」
「じゃぁ、治せばいいじゃないですか」
「いやなんだよ、検査や手術が。苦しい思いまでして生きるなんて、とても考えられない。それに、いずれはボケも本格化するに違いないし。とにかく、女房も死んじまい、子どももいなくて天涯孤独だから自由にできるさ」
「だから、いまのうちに死ぬって言うんですか」
「そうだよ、惨めな思いになる前にね。過去だけを抱いて幕を閉じる。体力と気力が残っているうちにだ」
「ぜいたくだ」
「えっ、何て言った？」
「ぜいたくだって言ったんです」
「ぜいたく……」
「そうです。ぜいたくです。人間はいずれ死ぬのだから、いまのうちに死んでおいたほうがいいという子どもじみた発想に聞こえます。
私なんか、可能な限り生きていたいのに死ななきゃならない。それなのに中里さんは、まだまだ生きる条件が整っているのに死にたいと言う。ぜいたくですよ、これは」
寺尾が少し声を荒げた。
「いや、そうじゃない。俺は自分の人生に、自分の責任でけじめをつけようとしているだけなんだ。絶対にぜいたくなんかじゃない」
幸平は身を乗り出し、寺尾に向かって叫んだ。
「でも、私から見れば……、まぁ、いいです。それぞれの考えですから」
寺尾の声が小さくなった。縄ばしごの金属音がやわらいでいる。風が少しばかり弱まったようだ。ホテルの横から突き出た岬の向こうには、湯河原から小田原あたりの灯がかすかに見える。
本当のところ、幸平にも寺尾が言ったぜいたくという意味がわからなくはない。自分はまだ生きていく力があるのにあえて死を選ぶのは、客観的に見ればもったいない話であり、ぜいたくだとも言える。

可能性が充分あるのに生きる努力をしない。まるで運命をもてあそぶかのようだと言われればそうだろう。でもそれは、それぞれの価値観にもとづいての話だから、一方的にぜいたくだと非難されるのも当たらないのではないか。

それじゃぁ、この男の場合はどうだろう。寺尾は、自分は生きていたいのに死ななきゃならないと言った。そこにどんな理由があるのだろうか。

「寺尾さん、あんたの、死ななきゃならないわけは何だい」

他人の死生観に異を唱えたやつの考え方を訊かないわけにはいかない。幸平は寺尾の顔をのぞき込んだ。

「それは……」

寺尾がわずかに顔を背け口ごもる。

「たぶん、入り組んだ事情があるんだろう。まぁ、話したくなかったらそれでもいいが」

「いや、話します」

少し向きになった声が返ってきた。

「立ちいかなくなったんです、会社が。会社と言っても、脱サラして背水の陣で始めた、従業員三人ばかりの小さなソフト屋ですけど、今度の大不況で仕事がなくなってしまって。従業員には、わずかな退職金を渡して辞めてもらったんですが、残ったのは借金だけという有様なんです。事務所を追い出された上に、コンピューターなどの設備や自宅までも借金の形にとられ、苦し紛れに消費者金融から借りたんですけど、取り立てが厳しくてアパートにも住めない状態で、にっちもさっちもいかなくなり、それで」

「それで、死のうっていうわけか。まぁ、どこにでもある話だ、こんなのは。それはそうと、家族はどうしたんだい。所帯持ちなんだろう？」

一瞬、寺尾は息を詰まらせた。

「まさか、家族をほったらかして、自分だけが死ぬんじゃないだろうな」

「いえ、そんなこと」

「じゃぁ、どうしたんだ」

「……別れたんです」

「別れた……」

「借金の取り立てが及ばないようにと。それで別の場所に移したんです、戸籍も別にして。女房もそうですが、二人の子どもたちにもつらい思いをさせて」

「うーん、そうか。家族だけは守ろうというわけだ。これも、どこかで聞いたことがある

ような話だが、切ないねぇ、目の当たりにすると」
今度は幸平が息を詰まらせた。
冷え切った下半身がしびれるようだ。思わず片手をつきながら腰を上げようとするが、自由がきかない。幸平は仕方なくそのまま座り込み空を仰いだ。
背後にある山の斜面から突き出た大木が、暗い空にかすかな陰影を作り出しながら揺れている。頭上を覆う雲の動きはわからないが、慌ただしく陸へと流されていく様子を風の音が教えてくれる。そんな視野の端に、寺尾のうずくまる黒い影。さて、どうしたものかと幸平は首を傾げた。
このままでは目的を果たすことはできない。この男を前にして、自分が先に飛び降りるなんてことは考えられない。かと言って、先に行かせるなんてこともできるはずがない。
身体を支えていた手の感覚がなくなってきた。幸平は、もう一方の手を床につけて起き上がろうとするがうまくいかない。いやに身体が重いのだ。こんなはずはないと腰に回した手がズボンのふくらみに触れた。
これだ、こいつを使おう。幸平は寺尾に顔を向けると、おもむろに口を開いた。
「寺尾さん、あんたの借金はどれくらいかね」
寺尾の身体がぴくりと動いた。
「ここに、売値で五百万円くらいのコインがある。これで利息だけでも払って、立ち直りのきっかけを作れないか」
と言って、幸平はずぼんのポケットをポンポンと叩いた。
しかし寺尾は、即座に「いや、それは」と小さく叫ぶ。
「だめかい。まぁ、あまり役に立たないか」
「借金は二千万円近く残っています。五百万円もあれば、消費者金融の方は始末がつくので、やり直しができるかもしれません。しかし」
「じゃぁ、そうしようや。この五百万円で死ぬのは中止だ」
幸平は、これで寺尾をこの場から追い払うことができると思った。
「でも、いいんです。見ず知らずの方にそんな迷惑をかけるわけにはいきませんから。実は、私には方策があるんです。それを実行すれば何もかも解決するんです」
寺尾の声には思い詰めたような響きがあった。その方策とは何だろう。そんなものがあれば死ぬことはないはずだが。
「いったい、それは何なんだ」

幸平は首を傾げながら寺尾の顔をのぞきこんだ。
「それは……」と寺尾が口ごもる。
一瞬、幸平は「まさか」と思った。この男は死ぬことによって、すべての負債を清算しようとしているのではないか。そうなれば、方法はひとつ。
「あんた、自分の生命保険をあてにしているんじゃないだろうね」
寺尾の身体がぴくりと動いた。
「それはだめだよ。保険は下りないよ」
「自殺だって下りるんです。加入してから三年以上経っているんですから、大丈夫です」
「いや、だめだ。あんた、ここから飛び降りたら死体は上がらないよ。そうなったら、死んだかどうかの証明ができないじゃないか。証明がなきゃ、保険会社は払いようがないんだぜ」
「うっ」という声が寺尾の口から漏れた。
「つまり犬死にだってことだよ、ここから飛び降りたって。それよりもこのコインでやり直しな。そうしたほうがいい」
寺尾はうなだれたまま動かない。
三浦半島あたりだろうか、空との境をかすかな濃淡で描く陸地が見える。夜明けが近いようだ。急がないと邪魔が入ってしまう。幸平は寺尾の肩に手をかけた。
「そうしろよ、な。チャンスが出てきたんだから、それを試さない手はない。少しでも可能性があるならば必死に生き抜くことだよ」
幸平は自分の言葉に嫌悪を感じた。意識してのことと言いながら、いままで否定してきたことを抵抗もなく口にした自分にだ。幸平は戸惑いを押し殺そうと歯を噛みしめた。
やがて寺尾は小さく咳払いをすると、開き直ったような顔つきで口を開いた。
「死体がなければ死んだ証明にならないから、生命保険が下りないということは間違いないでしょう。それじゃぁ、証明になる死に方を選べばいいことになります。例えば、あそこの木の枝で首をつるとか」
寺尾は、背後にある山の斜面から突き出た大木を指さしながら、
「でも、いまはやめます。なんだか、張りつめた糸が切れたようで……」と、急に重たい口調となった。
「だったら、これを持って早く引き上げたほうがいい。やり直すんだよ、もう一度。そうなれば、このコインも喜ぶってもんだ」

幸平は、ポケットのコインを袋に移し替えながら寺尾を促した。
「わかりました。お言葉に甘えてそうさせていただきます。しかし、中里さんはどうするんですか。まさか、私を引き上げさせた後、ここから飛び降りるんじゃないでしょうね。
それはないですよ。私には、少しでも可能性があるなら必死に生き抜けって言っておきながら、そんなこと。あなたの場合、生きていける可能性が私よりもはるかに大きいじゃないですか。
がんだって治る可能性が充分にあるし、経済面でも困ることはないんでしょう。ただ、先へ行って苦しむのはいやだから、いまのうちに死ぬなんておかしいですよ。だから、さっき、ぜいたくだって言ったんです。子供じみた発想だって言ったんです」
寺尾の言葉は理解できる。しかし、死というものを、このまま運命に委ねてしまっていいとも思っていない。
人間誰しも、生きる権利があるのと同じように死ぬ権利だってある。その人がもっともいいと思われるときに自分の人生の幕を閉じることは、その人の価値観にもとづいたものであっていいのではないか。本来、死は、その自由がきく間は、他人の指図に従うものではないはずだ。だから自分は、今夜がもっとも価値のあるときだと判断したのだ。
しかし、ここへ来て少し迷いが出てきたような気がする。寺尾に対する言葉が、そのまま跳ね返ってきたからなのだろうか。
自分が口にした
「少しでも可能性があるならば、必死に生き抜け」とか「やり直すんだよ、もう一度」という言葉が頭のすみでうごめく。寺尾をこの場から追い払いたいために、思わず口にした言葉なのに。それがいま、自らを揺さぶり始めている。
それにしても、あれほ固かった決心がこんなに簡単にぶれるなんて。自分の死生観とはこれほどもろかったのか。やはり、死を意のままに操ろうとする不遜な思いへの、内面的な反発がそうさせたのだろうか。
これではいけない、初心に立ち戻らなければ。このままでは、長い時間をかけて固めてきたものが崩れ去ってしまう。ここで揺らいだら、後々、大きな後悔に襲われるのは確かだ。
早くこの迷いを打ち払わなければならない。幸平は拳を握りしめながら、自分の考えを正当化する言葉を探した。
しかし、見つからない。すると、不意に感情が走り出た。

「俺は俺だ。干渉しないでくれ」
その言葉の勢いに寺尾は黙った。
三浦半島の影が、明けゆく空にくっきりと浮かび上がってきた。いまは寺尾の顔がはっきりと見える。五十歳くらいだろうか、思ったよりも若い。自分よりも二十歳は違うようだ。この男にはまだまだ長い将来がある。死を絶望の代価としてとらえることがあっても、そのことに、生きるのと同じ価値を持たせるなんてとても考えられないに違いない。
とにかく、この男と自分とは基本的に立場が違うのだ。幸平は唇を噛みながら、広がり続ける迷いを振り払おうとした。
網代の港から出た漁船なのだろうか、いくつもの小さな灯りが沖に向かって進むのが見える。風はすっかり止み、海面は穏やかだ。背後の山からは鳥の声も聞こえる。
急がなければ。幸平は立ち上がろうとして、寺尾がいないことに気づいた。見渡すと、その姿はフェンスの脇にあり、縄ばしごを手にしている。幸平は慌てた。
「おい、待て、話が違うじゃないか」
寺尾はその声を無視するかのように、くるくると縄ばしごを巻き上げ始めた。
「や、やめろ、待てというんだ。おい」
叫び声は出るが、身体が言うことを聞かない。手に力が入らず、そのまま幸平は横に転げた。肘で必死に身体を起こしながら首をねじると、寺尾は半分ほど巻き上げた縄ばしごを手にしている。
何をしてるんだろう。飛び降りるのではないみたいだ。幸平は目をこらしてその動作を追い続けたが、やがて「あぁっ」という大きな声を上げた。
縄ばしごがフェンスの外へ投げだされようとしているではないか。あれがなくなってしまったら今回の計画はご破算になってしまう。
「おい、待て、待ってくれ。それだけはやめてくれ、頼む」
幸平は大声で叫ぶと、起き上がろうとしてもがいた。しかし、寺尾はその動きを止めようとしない。
「やめろ、それは俺の物だ。勝手なことをするな」
しかし次の瞬間、縄ばしごは黒い塊となってフェンスの向こうに消えた。
身体中の力が抜けた。これで、計画のすべてがだめになったと思った。幸平は虚ろな目をフェンスに這わせ身体を横たえた。
東の空が黄褐色に染まり始めた。もうすぐ陽が上がる。そうなれば、再びうろうろと生

きる毎日が始まってしまう。
もう一度計画を立て直し決意を固めるには、長い時間が必要になるだろう。世の中の通念に逆らって死ぬ権利を実行するには、途方もないエネルギーが要るからだ。
それでも、やり直さなければならない。自分らしさが残っているうちに、どうしても終幕を迎えたいからだ。
幸平は静かに目を閉じた。波の音が聞こえる。昨夜は風に打ち負かされていた音がいまは確かだ。
「中里さん、すみません。勝手なことをしてしまって」
突然、耳元で寺尾の声が響いた。
「あぁするしかなかったんです。私だけ生き延びるわけにはいかなかったんです。中里さんは私に生きる手だてを与えてくれました。その人に死を選択させるなんてどうしてもできなかった。それで、あのようなことを」
寺尾の気持ちは痛いほどわかった。しかし大きな失望を与えてくれたことも事実だ。人の権利を踏みにじったとも言える。幸平は黙ったまま首をうなだれた。
「いまは、中里さんが言う死ぬ権利を否定しようとは思いません。しかしそれが、私には理解できないものであることも確かです。再び、あなたがその権利を実行するのを止めようもありませんが、少なくとも、私が頂いた、ではなくて、借りたコイン相当のお金をお返しするまでは生きていて欲しいのです。できるだけ早くそのときが来るようがんばりますから」
それはできないと幸平は思った。二千万円近い借金を抱えているのに、五百万円程度の金で立ち直るにはたいへんな苦労が要るだろう。いま世の中の景気は最悪だし、何年かかるか見当もつかない。それに、失敗でもすれば返済なんて不可能だ。
「だめだよ、そんなことは。今回はあきらめざるを得ないが、これからも、俺は俺のやり方でいくつもりだ。だから、あんたが心配することではない」
そうは言いながら、ほっとしている自分がいた。弾みで出てしまった言葉によって崩れようとしている信念に、安堵すら感じる自分がいた。
自らの意思で死を操り、死に価値を持たせるなんてことは生やさしいものではない。だから、いったんほころびが生じると、その考えはみるみる崩壊を始める。よく、死の覚悟が崩れたとき、人間はもっとも生に執着するという。
そうなってしまえば、立て直すことは容易ではない。もともと、心の底には死に対する

恐怖が潜んでいるのだから。

幸平はそんな自分に嫌悪を感じながらも、しばらくはがんともつきあいながら、流されて生きていくふがいなさを受け入れるしかないと思った。

とは言っても、いずれは病気や痴呆の恐怖と孤独にさらされた他人まかせの人生に、自らの意思で終止符を打たねばならない。そのときは、心身がともに自由であることが必要だから、できるだけ早くこの状態から抜け出さなければ。

しかし、いまはそのポテンシャルを高めていくための充電が必要だ。そう考えれば気が楽になる。しばらくは、病気を忘れ、怠惰のうちに過ごしてみるか。

幸平は少しばかり吹っ切れたような気持に包まれながら、ゆっくりと上体を起こした。

山の端を黄金色に染めて輝く朝日が、目の前の透明なフェンスを通して射し込む。

ついさっきまで暗黒の世界であったフェンスの向こうが、いまは、光で満たされようとしている。幸平には、その光が胸の中にまで入り込んでくるように思えた。それは、ひとときかもしれないが、生きているという感覚を呼び起こしてくれているようだ。

いつまで耐えられるかはわからないが、生きる恐怖と対峙しながら、生きる感覚に浸ってみるか。幸平は大きく息を吐きながら「よし」と心の中でつぶやいた。

土田ひろし

昭和十三年・岐阜県生れ男子、七十一歳

昭和三十六年、大学卒業・就職に伴い静岡県沼津市へ

平成十五年、四十二年あまり、主に技術屋として勤めた機械製造会社を退職

同年、退職仲間と放置竹林の無償整備・竹炭つくりの活動開始

活動を続ける中で、高齢者の死生観を描きたいと思い執筆を始める

現在、竹林整備・竹炭づくり、会社顧問、執筆と、三足のわらじをはいて多忙な

毎日